第２回金沢の景観を考える市民会議

日時　2010 年 11 月 20 日（土）13:00～16:00

会場　金沢市文化ホール２階　大集会室

主催者あいさつ

須野原　雄（金沢市副市長）

ご紹介いただきました副市長の須野原です。今日は、「金沢の景観を考える市民会議」にこうしてたくさんの方にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

この市民会議は隔年で開催することになっていますので、今回が２回目になります。今回のテーマは、ご案内のとおり「市民との協働による景観まちづくり」です。まちの中に新しいものを加えるときには、周囲との調和を念頭に、どう新しい価値を加えていくかという視点でご討議いただくことを予定しています。大変意義のあるテーマだと思っています。基調講演をいただきます森先生をはじめ、パネルディスカッションでのパネリストの先生方にはよろしくお願いしたいと思います。

ご承知のとおり、金沢というまちは恵まれた自然と歴史文化遺産を受け継いできていますし、かつ、北陸の中心都市でもあります。ですから、まちづくりの基本は、保存と開発の区分けをきちっとして調和させていくということでなければなりませんし、こうした基本的な考え方に立ちまして、これまで古い伝統的なまちなみや景観を保存し、継承してきました。同時に、近代的なまちなみ、都市景観を創出して加えていくということも大事な視点で、こうした取り組みを通じまして、金沢独特の個性を磨き高め、魅力と活力のあるまちづくりを進めてきたということです。

また、そのための施策として、昭和 43 年に全国に先駆けて伝統環境保存条例を制定したことは大変意義が大きいと思っていますし、平成４年には景観都市宣言もしています。さらに、国が景観法を制定いたしましたので、この機に合わせて、これまでの条例の趣旨を踏まえながら、平成 21 年には金沢市における美しい景観のまちづくりに関する条例という新しい景観条例を制定してきたところでございます。

これまでのそうしたまちづくりが評価されまして、昨年は国の歴史都市の第１号に

認定されました。そして、今年に入りましては、城下町の伝統と文化が国の重要文化的景観に選定されることにもなったわけです。歴史に責任を持つべき都市である金沢の今後の課題の一つには、無電柱化の推進と町家の再生・活用があろうかと思いますし、無電柱化を推進して町家を生かしていくことで、さらに個性が際立つようにもなっていこうかと思っております。４年後には北陸新幹線が金沢まで開業いたしますので、こうした美しい景観を金沢の財産として、また金沢の魅力として、ぜひ発信していければと考えているわけです。

まちづくり、とりわけ景観まちづくりには、市民の英知が結集されなければなりません。そうした意味で、本日の市民会議が市民や事業者の皆さんの美しいまちづくりに対する関心をさらに高めることになり、理解を深めていただく契機になりますようにと期待しているところです。

今後とも皆さま方のご協力をお願いしまして、ごあいさつとさせていただきます。ありがとうございます。

（司会）　ありがとうございました。それでは、森俊偉様によります基調講演に移ります。講演に先立ちまして、森様のご紹介をさせていただきます。

森様は、世界的な建築家であります槇文彦氏が主宰する「槇総合計画事務所」を経て、平成２年に独立して事務所を開業され、平成７年より金沢工業大学教授を務めていらっしゃいます。森様は、大学の建築学科で教鞭を執られている一方、建築家として室生犀星記念館や香林坊賑わい広場をはじめとする数々の建築物の設計を手掛けていらっしゃいます。また、ご多用の中、金沢市景観審議会建物部会長として、民間・公共の建築物の景観配慮などに関して具体的な提言を取りまとめていただいているほか、金沢市都市計画審議会会長を務められるなど、要職を歴任されています。そのほか、地元経済団体が中心となり、優れた建築物を表彰している「金沢都市美文化賞」の審査にも、長年携わっておられます。

本日は、「新しい景観の創造―まちなみとの調和を目指して―」と題しましてご講演いただきます。それでは、森様、よろしくお願いいたします。

基調講演「新しい景観（価値）の創造―まちなみとの調和を目指して―」

森　俊偉（金沢工業大学教授）

ご紹介いただきました森です。よろしくお願いします。今日は、今紹介がありましたように、「新しい景観（価値）の創造―まちなみとの調和を目指して―」ということで少しお話をしたいと思います。時間としては35～40分くらいかと思っております。

まず、「景観」という言葉があります。よく使われるのは「景観まちづくり」という言葉で出てくるわけですが、なぜ景観か。最初、私がまちづくりにかかわることで景観という言葉を聞いたときにそう感じました。そこで私なりに調べたり、それについて考えた時期がありました。

まちづくりの第一の目標は、快適な生活空間等を求めていくことになるわけですが、まちづくりに当たって景観という言葉が非常に分かりやすい。「景観のいい街や都市」といわれているところは、生活環境としてもいい環境を保っているところが多い。つまり「景観のいい街や都市」と、生活していく上での快適な生活空間が、割と連動している場合が多いということが１点あると思います。

それからもう１点、よいまちなみ等を含めて、自分のまちの景観が優れていると自負しているところでは、自分のまちに対して非常に強い誇りを持っている人が多いという点です。アイデンティティという言葉がありますが、景観が優れているといわれているまちは、ある意味ではまちの個性や特徴が非常に明快な姿を所持している場合が多く、「自分のまちはこういうまちですよ」というようなことを人々に向かって自慢するときに非常に説明しやすく、同時に、自分のまちに対して非常に強い愛着と自信を持っている人たちが多いということが言えるかと思います。

そこで、「まちづくり」という言葉をある意味では代弁する形で、「景観づくり」、「景観の整えを図っていく」ということがいわれるようになったかと思っています。つまり、景観づくりというのはフィジカルな側面も多いので、向かっていく目標が見えやすい、理解しやすいというような意味合いがあって、景観という言葉がまちづくりの一つの代名詞的に使われるようになってきたのではないかと考えています。

次に、景観を整えていくときのプロセスといいますか、取り組みという意味合いでは、例えば景観をつくっていくときには、公共建築などが果すべき役割が一つ存在します。公共建築を造るときには、景観的な整えを含めて、よい手本になるような造りが当然必要になります。しかし今日のシンポジウム全体のテーマにもあるように、昨今、協働という言葉がよく使われるように、まち全体の景観の整えを図っていこうとするときには、公共建築といっても数には限りがあります。逆に言いますと、まちの大部分をつくり上げているものは、それぞれの人々の住居空間であり、また、商業施設としての店舗とか、そういった一般建築が95%とかそれ以上を占めるわけです。

そういうことを考えていきますと、本当の意味でのきちんとした景観の優れたまちや都市をつくっていこうとする時、一般の人々のそうした意識と取り組みがないと、現実的にはなかなか出来上がらないものだといえます。優れた景観を持った都市やまちをつくっていこうとすると、一般の人々の景観に対する日々の取り組みと心掛けが大きな意味を持ってきます。本当の意味での景観の優れたまちをつくり上げようとすると、こうした協働の取り組みがない限りは、現実的にはなかなかできていかないものだと思います。つまり、一般の方々と協働していく姿勢や、一人ひとりが自分たちでつくり上げていくという心構えがますます必要で、重要になってくるのだろうと思っています。

次に、金沢というまちの景観の特性という点で、どういうものがあるかということを少し述べたいと思います。

（以下スライド併用）

これが金沢の全景写真です。皆さまもよくご存じの写真で、金沢のまちは山から平野部、そして海にかけて広がっているわけですが、金沢のまちは、今この写真を見ても、現代都市としての造りと歴史的なまちとしての造りが同居・共存しているまちということが言えると思います。

これもよく出てくる写真なのですが、東山の茶屋街界隈です。まず金沢のまちの景観的な意味合いを含めた大きな特徴は、この写真に出ていますように、いわゆる伝統的なエリア、歴史的なエリアという、古い歴史を積んできた地域があることではないかと思いますし、それは万人が認める所でもあります。

次に、これは駅前の大通りの写真ですが、金沢は北陸 3 県の中では一番大きい都市ですし、人口としても 45 万人、生活圏という意味では 60 万人ぐらいの都市だと思います。そうしますと、歴史的な都市としての役割と同時に、現代都市としての役割も担っていかなければいけないということがあります。そういう意味では、金沢の大きな特性の一つとして、伝統的なエリアと現代的なエリアという二面性が同居している都市、その同居を受け入れながら景観整備等を図っていく必要がある都市ということが言えるかと思います。そして、そういう歴史的な部分と現代的な部分をうまく調和を取りながらどう積層していくかということが、金沢の役割として非常に重要なことではないかと思います。

そういう歴史的なものと現代的なものを両方受け入れながら、非常に魅力的な都市をつくっている事例としては、規模が相当大きいですが、パリのまちがあると思います。パリのモンマルトルの丘に上って旧市街をずっと眺めると、家並の高さのラインなどが非常にきれいにそろっています。さらにパリの旧市街の中心部から周辺部の方へと目を移動しますと、見事にその周辺部に高層ビル群が展開しています。新しい部分と古い部分の使い分けとコントロールがなされています。また、旧のまちなかにはもちろん古い建築物がたくさん残っているわけですが、それと同時に、要所要所では新しいものも非常にうまく受け入れていっていると思います。

それぞれ、その時代を代表するような価値を持ったものをきちんと維持・継承し、まさに新旧両面を共存させた厚味のある魅力を発揮している都市だと思います。金沢のまちも伝統的・歴史的なものとを継承しつつ、現代的なものをうまく共存・調和させ､その魅力を積層していくという姿勢がますます必要になるだろうと思っています。

これは金沢の景観の区域を示す図面です。金沢の場合も、中心部における、いわゆる伝統的な景観をつくっていくべきエリアと、新しいものを受け入れていくべきエリアを、かなり明確に分けながら取り組んでいると言えるかと思います。

次に、今ほど言いました新しいものと古いものの共存の話と、もう 1 点、金沢の大きな特徴としてあるだろうと私自身が感じているのは、卯辰山、小立野台地、寺町台地という三つの台地があって、その間を犀川と浅野川が海に向かって流れ込み、金沢

の中心部はちょうどその境界部につくられたまちとして地形の起伏が多いという点があると思います。

それは、まちなみの構成の中にも、非常にきめの細やかなアップダウンとの整合性を図るというようなことも含めて、大きく影響していると思います。

これは斜面緑地の保全図です。地形形状とのかかわりという点では、金沢は斜面緑地保全条例を持っています。緑に塗ってあるところは斜面緑地の保全地域に指定されている部分です。緑地のゾーンとしてはもう少し広がっているのですが、東京からこちらに戻ってきて航空写真で金沢のまちを見たときに、意外とまち中の緑の量が少ないと思いました。しかし、実際にまちに立ってみますとかなり緑が多く、自然度の高い都市という印象が一方ではするわけです。

その違いはどこにあるのかと考えたことがありますが、一つは、斜面が非常に多くて起伏も多いので、まちに立って山側を見ますと立体的に緑が見えるわけです。起伏が少ない平面的な都市に比べると、立体的なまちの造りが緑の量を非常に多く感じさせていますし、斜面地というのは開発しにくいところでもあり、逆にしっかりと緑が残る結果ともなり、かなり自然度の高い雰囲気をまちの中に描き出しているということが言えるかと思います。そういうことで、金沢の街にとってはこういう斜面地の緑を重要視して扱っていくということも、非常に大切なことかと思っています。

同様に金沢のまちの造りや、景観的な特性を示すものとしても、立体的な地形形状を持っているということが大きな要因の一つに考えられるのではないかと思っています。故に、建築物を造ったり、道路等を含めて外部空間の整備を図っていくときには、立体的な地形形状を尊重すること。それから、微地形という言葉がありますが、狭い範囲で微妙にアップダウンを持っているような地形の形状なども大切にしながら取り組んでいくことが、より金沢の景観の特徴を明快化し、魅力化していくことになると思います。

次に、これはまちの中心部を撮った写真です。手前が犀川です。景観を考えていくときに、大きくは二つの要点があるかと思っています。今ほど話してきました金沢のまちが持っている特徴として尊重すべき要点が一つあると思いますし、もう一方で、ある意味では当たり前のこととも言えるわけですが、全国共通の身近な景観を整えていく上で重要な要点が幾つかあるかと思っています。

それは何かといいますと、一般の人たちの日常の生活空間の造りなどとも密接にかかわる部分で、当然のこととして一人ひとりが対処していく必要があるなと常々思っていることです。例えば、家の中を冷房したり暖房したりする空調機には屋外機がセットで付いてくるわけですが、その屋外機が無造作に住宅などの外壁面に取り付けられていることが多い。

ビルなどについても、以前 JAL ホテルの屋上に上ってまちを見下ろす機会があったのですが、ビル群の屋上面が随分汚いのです。それはなぜかというと、一つは多くの設備機器や配管が屋上に無造作に置かれ、それらに対するカムフラージュがほとんどできていないからです。そういう設備機器の取り扱い、特に屋外に出てくるものについて、それをカムフラージュしていくような心掛けなどが身近な景観整えの問題としては重要だと感じることが多々あります。

それから、まちの中心部にマンション等がたくさんできてきて、天気のいい日などは、ベランダに洗濯物が出てきたりするわけです。郊外部だと、洗濯物がはためいているという風景も人々の生活の活気みたいなものが見えてなかなかよいもので、場所によると思うのですが、ただ、まちなかのオフィス街にあるマンション等では、洗濯物がベランダの手すりに隠れるようにして干すというような配慮も必要なのだろうと思います。

同様に、身近で当たり前の問題として、広告塔や看板等、あまりけばけばしくて巨大なものは避けていく努力をする必要もあります。これら、景観を整えていくときに、ある意味では常識的なこととして常に考慮していくべき一般的な事項が要点としてあると思います。

続きまして、私が今まで建築物等の設計をしながら取り組んできた事例を少し示してもらえるとありがたいという要望もありましたので、幾つかを紹介して、景観に絡むところについてコメントを加えていきたいと思います。もちろん、設計は景観への対応だけで進められるわけではなく、今から紹介する建物も、すべてを景観面からの

視点のみで設計したものではないということで、よい面と十分にでき切れていない面もあるかと思いますが、金沢での事例を中心に、その他の都市での事例も幾つか加えながら、景観的に配慮しながら進めたなという感覚が残っている部分について、説明を加えていこうと思います。

＜室生犀星記念館＞

まず、最初は金沢の事例がいいかと思いますので・・・。これは千日町に造った室生犀星の記念館です。室生犀星が生まれた場所ということで、金沢市から記念館を造りたいという話がありまして、私が関わることができたものです。このとき、景観的な意味合いではどんなことを考えていたかということを少し述べたいと思います。

一つは、ここに見えているのが千日町のまちなみです。犀川大橋の西側に当たるところですが、犀川を越えると現実的にはまちなみとしては崩れているところが多く、千日町のこの辺も、木造の造りの勾配屋根がそろったまちなみの部分と、間にぽつぽつとペンシルビル的なものが混ざり込んでいるエリアがあります。

これは、アップで撮ったものです。この辺りは木造の造りのまちなみと新しいものが混在しており、最初、どういうデザインをすればいいかと思いながら取り組んだわけです。できれば、まちなみの連なりの持っている伝統的な要素をある意味では受け入れながら、一方で、もう少し現代的な表情も建物に持たせていきたいという思いも持ちながら設計しました。

屋根勾配などは、ここの並びにある、もともとの町家風の造りの建物に同調し、勾配屋根で合わせていくよう心掛けました。表情としては、使っている材料は、コンクリートの打ちっ放し、アルミのサッシ、ガラス、それから金属のアルミパネルやステンレスのパイプなど、かなり現代的な材料です。しかしその中で、例えばアルミのサッシに入っているガラスの中にガラス繊維の半透明のものを挟んで、障子の明かりのような雰囲気の持てるものにするなど、何か和風のテイストを持ちながら、新しい表現を取り込んで進めようという思いで為したものです。

また、機能上、前面に少し余裕の空間というか、わずかな引きを取りたいということがありまして、そこに樹木を植え、少しでも緑の木陰を提供できるようにと考えながら進めました。

これは隣の家との間を見たものですが、フロント部分の建物と後ろの建物の間にあるちょっとした坪庭のような中庭空間に、西日をコントロールする意味と、建物の内側から隣の家のプライバシーを守る意味もあり、格子風のものを入れています。これも、ガラス繊維を加工して作ったグレーチングを、格子的な効果を期待しながら使ったものです。このように、新しい材料を使いながら、全体的に伝統的な要素との連続感を保てるようにという思いを持って進めました。

これが建物のファサード部分です。公共の施設であり、多くの人々が出入りしますので、フロント部に少し引きの空間を取っています。そうすると、まちなみがどうしても不連続になってきますので、ゲート風の門構えのようなものを作ることによって、まちなみの連続感を保ちつつ、空間を確保していくという造りを施しています。ただ、この隣に、このプロジェクトがかなり進行した後に、駐車場用のスペースを購入でき、そちらの方にもこういうものを連続させたかったのですが、時期的にそれができなくて、それ故にまちなみの連続感をやや分断することになったのが、自分としては残念だったなという思いを持っています

ここに室生犀星の記念館ですよというサイン板を建てているのですが、こういうものも、その大きさや造り等を含めて、朽ち果てにくい材料で、必要最小限の大きさで案内できるものを置くなど、それなりに気配りしながらデザインしていったという経緯があります。

サイン板も、大きくて簡単に内容把握できるのがいいのかもしれませんが、景観的なことを含めていくと、必要最小限の範囲でうまく効果を発揮することのできるようなものにしていくのがより望ましいと思っています。

余分に１枚入れておいたのですが、これは建物の内部なので、景観的にはそんなに影響は大きく出ないのですが、入り口のところから入りますと、こういう中庭空間があって、それが裏庭に向かって抜けています。通りを行きかったり前庭のところに寄ってきますと、ずっと敷地の奥まで明かりのゾーンが点在しているのが見えてくる、そういう効果も意識しながら造っていったという経緯があります。

＜射水市／川の駅・内川＞

次に、これは金沢ではなくて、富山県の射水市、以前は新湊と言ったところですが、そこに川の駅を造ることになったのです。道の駅というのがありますが、それの川版ということです。ここが昔からある運河状の「内川」という名前で呼ばれている水路です。ここはすごくいいところです。極端なことを言うと、イタリアのベニスのすぐ近くにムラーノ島とかブラーノ島という小さな島がありますが、そういうところの水路の雰囲気とすごく似ています。私は以前からこの水辺に興味があり、このまちなみをもっときちんと維持できていくといいのにと思っていました。今もそう思っているのですが、何とかして関わる機会ができるといいなと思い続けています。

この建物はプロポーザルコンペで優秀賞を取り、関わることになったものです。案の作成時も、まちなみの持っている屋根勾配は尊重しながら、それを成立させたいという思いと、それから、かつてこの川に面して、陸揚げしたものを入れていく倉庫がずっと並んでいまして、今もちょっと蔵のような造りの建物がこの水路に面してあるわけですが、少しそういう表情を持たせながら造っていこうという思いを持ちながら取り組んだものです。

そのまちが持っている、まちなみの文脈という言葉がありますが、まちなみの特性みたいなものを尊重していく。特に文脈、特性がはっきりしているところは、そういうものを尊重していくという姿勢がやはり必要ではないかと思いながら、設計を進めました。

川の駅の２階部分には、半屋外のテラスを造りました。これが内川という水路。これが、そこに面したまちなみの様子。向こうに見えるのが高岡の二上山です。手前の方へずっと下りますと、同じようなまちなみがやはり展開しています。こういうまちなみの良さそのものもぜひ見てもらえる場所も造りたいなと思って造ったのが、このテラス部分です。

＜富山県弁護士会館＞

次に、これは富山市で建てました富山県弁護士会館です。これもプロポーザルのコンペだったのですが、このときに重要視して提案した景観絡みの点では、ここも結構まちが込んでいますので、まちの通り沿いいっぱいに昔からの建物や、町家などが建

ち並んでいます。このプロポーザルのときに要求されたのは、それなりの駐車台数を取りたいということでした。普通に考えると、道路側に駐車スペースを取って、コンビニスタイルで後ろの方に建物を造って、車が出入りしやすいようにするという考え方が何となく読み取れたのですが、そうしますと、まちなみのそろいが分断されてしまいます。そこであえて、表通り側ぎりぎりのところに、隣の建物等と並んでまちなみの連続性を作っていくという配置案を提案しました。

これがそこの部分を見たものです。これが表通りです。手前のここから住宅地に入っていく道になるのですが、ここでもずっと敷地ぎりぎりに建物を造りまして、通りのファサードの連続感を保っています。駐車スペースは、Ｌ字配置の建物の後ろの方に囲い込むという形にしました。まちなみの連続感を優先させた方が、まちの造り、景観的な意味合いを含めて望ましいと考えて提案し、それが結果的には受け入れられたわけです。

＜東京都世田谷／コーナーズ＞

次に、これは、話がちょっと飛びますが、まだ東京にいて独立してすぐの頃に、東京の世田谷区で造ったものです。場所は世田谷の住宅地で、表の通りの幅が４ｍぐらいしかなく、結構建て込んで道が狭い所でした。そこで、２メートルぐらい壁面線を後退させると高さに対しての緩和があるなど、東京という大都市ですので、建て込んでいるところに建築物を造るとき、望ましい方向へ誘導するための緩和制度を特別に持っている訳です。そこで、それを使いながら、通りの幅員を６メートルぐらいに広げて建築を造っていくというやり方をしました。

ここでは地下にも居室を造りました。土地の値段が高い所ですのでそういうことも可能な訳です。２メートルの壁面線後退部分に明かり取りのドライエリアを設け、車の出入りに余裕を持たせたり、通りを歩く人に対しても余裕を持たせる等の意味合いで、壁面線後退の考えを優先しながら進めたわけです。

また、バルコニーのひさしが必要なところには、アルミのパネルで、二重に屋根のかかるところは光が抜けるような細かい穴を開けたパンチングメタルとし、洗濯物を干したりするところは穴の開いていないパネルにして造っていきました。こうした配慮で、できるだけ通りの圧迫感も弱めたいという思いを持ちながら設計したものです。

これはちょうどマンションに入り込んでいくところのゲートで、これが屋外階段です。これらは、２階、３階に上る人たちに対して明かりを与えるためのモニュメント的な照明器具や、この建物の名称等を入れたサイン板などもきちんとデザインしながら、周りの雰囲気が良くなるようにと考えて設計したものです。

用意したものを全部説明していると時間がオーバーしそうですので、ちょっと飛ばして先に行きます。何枚か飛ばしていただいて、金沢都市美文化賞に応募した事例のところまで進めてもらえますか。では、香林坊賑わい広場を出してもらえますか。

＜香林坊賑わい広場＞

これは香林坊賑わい広場です。まちなかの屋外空間も非常に大きな都市景観的な意味合いを持っていると常々思っています。この広場を設計するとき、現代的な表情にしようか、少し歴史的な表情にしようか、かなり迷いました。というのは、ここはちょうど 109 の後ろで、鞍月用水に面しているところです。ですから、現代的な要素が強く攻め込んできているところでもありますし、一歩中に入ると今度は長町の武家屋敷の方につながっていく非常に歴史的なエリアでもあります。この場所にどちらの性格を持たせるのがいいのかということで迷った訳です。結果的には、109 などの影響が非常に大きいということで、現代的な造りを優先していきました。

これは香林坊賑わい広場の夜景です。金沢市は夜景観にも最近非常に力を入れています。場所によって夜の風景、明かりのあり方がどうあるべきかということも、夜の時間帯が長くなっている現代都市としては、重要なことと思います。そこで、明かりのあり方についてもどうしようかと考えながら設計しました。

これは、香林坊賑わい広場での「せせらぎまつり」の様子です。この広場空間を拠点にして祭りのいろいろな仕掛けも行なっているということです。広場の活用がまちの賑わいづくりに運動していくとよいと思っていますが、そういう意味では、ここはかなりうまく稼動しているのではないかと思っています。

＜木倉町広場＞

これは木倉町の方に造りました木倉町広場です。この辺りには、皆さんご存じのよ

うに和風の割烹などが多く並んでいますので、少し和風の雰囲気を持った落ち着きのある広場空間の方が、望ましいのではないかと考え、香林坊賑わい広場に比べると、あんどん風のデザインの明かりを入れるなど、伝統的な和の雰囲気に同調する広場としました。エリアの使い分けみたいなことをかなり頭に置きながら設計しました。

では、時間が押してきているのでちょっと速めに進めますが、金沢では、今年 33 回目に当たる金沢都市美文化賞というものを設けています。私もその審査に長く関わっているのですが、よいものとよくないものを判断していくときに、金沢の現代的なエリアなのか、伝統的なエリアなのかも考慮しています。伝統的なところなら伝統的なところで、それぞれきめの細やかな役割と特徴を生み出していますから、それぞれのエリアの特徴との整合性も頭に置きながら審査にあたっています。これまでに受賞されたいくつかの作品を紹介したいと思います。

＜石川四高記念文化交流館＞

これは四高の記念館になっている施設です。もともとれんが造りのクラシックな造りの建築でした。そこに新たな内部機能を加えていっていますので、部分改修が発生します。しかし、ガラス等を使ってあまり存在感のない改修を図り、古いものの造りをうまく生かしつつ新しい機能にも対応できるように造っています。また、後ろが中央公園になっていますが、そういう緑のゾーンともしっくりいくようなデザインと造りになっているということで、都市美文化賞に選ばれたものです。

＜黒田邸・みふく・中川邸＞

これはやはり伝統的なエリアで、浅野川沿いの主計町の並びの一角にあるものです。３棟が同時期に外壁等を旧来の造りにある程度合わせるような形で修復して造っていったものです。主計町のこの辺りは、伝統的な造りの町家が多く残り、歴史的なまちの文脈が非常に明快なところです。こういうところでは、より一層既存の文脈を尊重しながら新たなものを造っていくという姿勢が必要だろうと思います。そういう意味でこれも評価されたものです。

＜大手町の家＞

これは大手町です。ここの一角にもこうした古い家並が残っています。なぜこれを挙げたかといいますと、こういう格子を用いた造りにして、比較的簡単な手当てでうまく伝統的な雰囲気をつなげているからです。写真では見づらいと思いますが、よく見ますと、空調の屋外機などを全部この裏側に置いて、うまくカムフラージュしています。よく見ないと分からないのですが、設備機器をうまく隠ぺいしながらまちなみの伝統的な表情をつくり上げているということで、評価されたものです。

今度は少し現代的なものでよいものということで、幾つかお見せしたいと思います。

＜金沢２１世紀美術館＞

これは皆さんよくご存じの 21 世紀美術館です。これもプロポーザルの全国コンペで選出されたものです。非常に賑わって評判がいいわけですが、造りの面から見ますと、随分現代的な材料を使っています。金沢の伝統的な風土に合うのかということが、コンペの結果が出たときから心配事の一つとして言われていたかと思います。しかし計画では駐車場や収蔵庫など、あまり景観的によい役割を果たしてくれそうにないものは地下２層にほとんどしまい込み、地上に出てくるものは必要最小限の範囲にして、高さを低く抑えて造られています。つまり、周りを取り囲んでいる小規模な建物群ともうまくスケール感が合う、親しみの持てる造りとなっていると思います。

私もこのコンペに参加したのですが、そのときは囲み型の広場みたいな計画を提案しました。なぜそうしたかといいますと、敷地側からは広坂通り側の商店街の裏側が見えたり、知事公舎側の用水も、今はきれいになりましたが、当時汚かったのです。つまり全部街の裏側が見えてくることになりますから、「建物を中心に置き、四周を公園広場とする」こういう提案はないだろうと考え、最初から違う提案ルートを走ったのです。しかし、結果的にはこういう造りとなって、四周を取り囲んでいる街区のそれぞれが個性的な表情を見せています。また背面を見せていた広坂側の建物などは、最近どんどんきれいな表情に造り変わってきています。裏が表にさらけ出されることになり、逆にそれが「てこ」となって、いい表情に造り変えられてきている。知事公舎側の用水のところも、どんどんきれいに整備されて、周辺の景観を良くする方向の一つのきっかけになったと思います。

ということで、現代的な表情を取っていても、十分にこうした景観的な役割を果た

せるということを示している好例かと思います。

＜泉が丘の新しい街並み（全 10 棟）の開発＞

これは、泉が丘の方で民間のデベロッパーが計画した、10 軒ぐらい住宅が並んだ住宅地計画です。これも普通ですと、一つの敷地に一住宅を次々に建てていき、建てる方は自由勝手に進めるみたいになってしまうところです。しかしここでは、この 10 軒を一つのまちなみとしてデザインし、屋根勾配を合わせたり、道路面から壁面線を後退させて、緑の植え込み等をきちんと植え、道路に面したところの舗装も工夫し、まちなみとしての造りを非常に意識しながら造っていると思います。

まさにこれなどは、協働の精神をよく現しているものだと思います。事業者の思いがないとなかなかできないと思いますし、購入する人にもそういうものを受け入れていく目と考えがないと、成立しないものだと思います。これは協働していく姿勢と可能性が評価されたものといえます。

では、ちょっと時間が予定より過ぎてきていますので、事例紹介はこれぐらいにして、締めの言葉にかかりたいと思います。景観的な配慮を図っていくときに気を付けるべきこととしましては、その地域の特性を十分理解し、それとの調和を図るように努めていく必要があること。合わせて、隣接している家並みとの連続感や調和ということに配慮していく姿勢が、基本的に必要だろうと思います。

また、景観の整えを図っていくとき、隣接している地域の生活環境が良くなっていくような緑化や、空間的なゆとりを考えていく必要があること。それから、当たり前で分かり切ったことですが、余分な付加物や屋外の設備機器、広告塔の取り扱いなど、一人ひとりが慎重に対応を考えていくということの積み重ねが、非常に重要なのではないかと思っています。

最初の切り出しのときにも言いましたが、一般の市民の方々、それから事業を推進する人、行政の方々、すべてがうまく協働歩調を取りながら取り組んでいく。そうでないと本当によい景観というのは出来上がっていかないだろうというのが、私が常々感じているところです。この後、パネルディスカッションがありますので、またその中でいろいろ議論したいと思っております。

少々駆け足になり、途中飛ばしたところもありましたが、基調講演ということで私の話を終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

（司会）　森様、ありがとうございました。皆さま、森様にいま一度大きな拍手をお願いいたします。

続きまして、事例発表として、景観サポーターの取り組みにつきまして、金沢市景観サポーターの吉田芳弘さんと向井寛治さんがご報告します。景観サポーターには、地域の景観資源の取材や調査などにボランティアで従事していただいています。本日は、これまで２年間の活動を報告していただきます。

それでは、吉田さん、向井さん、よろしくお願いします。

事例発表（活動報告）「景観サポーターの取り組み」

吉田　芳弘（金沢市景観サポーター）

向井　寛治（金沢市景観サポーター）

（吉田）　景観サポーターの吉田です。

（向井）　向井です。

（吉田）　これから、景観サポーターの取り組みについて発表させていただきます。

（以下スライド併用）

景観サポーターの取り組みは、活動としては次の四つが主なものとされます。点検（市内の景観チェック）、誘導（市民や事業者に対する景観誘導）、取材・記録（金沢特有の景観資源の調査）、参画（景観に係る計画策定への参加）。われわれはこの四つのうち、画面に赤で示した点検と取材・記録について取り組みました。

ほかの景観サポーター１期生の紹介をさせていただきます。椿野さん、東原さん、駒帰さん、島田さん、津田さん、稲垣さん、福田さん、そして向井さんと吉田の 9 名で活動を行いました。任期は平成 21 年 1 月 24 日～平成 23 年 1 月 23 日ということで、

金沢市長より委嘱を受けております。活動からちょうど２年がたとうとしています。

われわれの活動内容について紹介させていただきます。

まず一つ目ですが、古写真などの収集・整理を行いました。次に二つ目ですが、定点観測写真撮影・台帳作成を行いました。三つ目に、景観勉強会を行いました。四つ目に、金沢市広報「いいね金沢」へテレビ出演いたしました。五つ目に、定点観測写真分析評価カルテの作成を行いました。最後に六つ目ですが、啓発用 DVD の作成をしました。

1 番目は古写真などの収集・整理で、これは過去に発行された文献資料を収集・整理することです。この表にあるように、名所図絵、景観写真などから収集・整理を行いました。

これらが収集整理した古写真の一例です。ちなみに左下の写真は、尾山神社界隈の古写真です。また、右下の写真は橋場町界隈のものです。

次に、二つ目に定点観測写真撮影・台帳作成を行いました。目的としましては、従来の風景写真はシンボリックなアングルでしか存在しないため、旧市街地を網羅した日常的な現況写真を残すこと。そして、平成 21 年 10 月に施行された景観条例による誘導成果を測るためにも必要であり、今後定期的なスパンで追加撮影していくこととしています。

写真の撮影範囲は、画面にある全体景観区域の中で、全部で 94 の景観区域があるのですが、その中で 69 区域において、各エリアで、交差点ごとに写真撮影を行いました。写真の地点数は 363 カ所、写真の数は 1,172 枚にも上りました。

これが定点観測した写真台帳の一例です。ちなみに、KS46 と小さく書いてあるのですが、KS は景観サポーターの略で、46 は区域 No.46 を示しています。この台帳をロビーに展示してありますので、ぜひご覧ください。

（向井）　引き続いて向井が報告します。

三つ目としまして、景観サポーターとしての見識を高めるために、景観勉強会に参加しました。まず１番目ですが、景観文脈、色彩、広告物について山岸先生から講義をいただきました。２番目に、歴史資産としまして、金沢町家や惣構について増田先生から講義をいただきました。３番目に、歴史的経緯として、城下町の成り立ち、町名などについて屋敷先生から講義をいただきました。４番目に、写真撮影の技法について宮村先生から講義をいただきました。各２時間ご講義いただいて、金沢の景観について、非常にいい勉強になりました。

四つ目ですが、MRO で放送しております金沢市の広報「いいね金沢」というテレビ番組で、景観サポーターの活動について取材を受けました。この画面はそのときの映像の一部で、勉強会の様子やサポーターへのインタビューで、景観サポーターの取り組みについて PR を行いました。

五つ目は、定点観測写真分析評価のカルテの作成ということで、撮影した写真に関して、景観向上要因、景観阻害要因を明らかにし、景観誘導のための提言を行うことを目的として行いました。この画面はある一例ですが、場所は東山１丁目、旧観音町の通りです。今では観光客がかなり通っているのですが、自動販売機の色がこのまちなみにふさわしくないと思いまして、事例として紹介しました。

次の事例は彦三１丁目ですが、ここにも土塀がかなり残っていまして、ここを修景すれば第二の長町の武家屋敷跡のような観光地になると思いまして、これも提案いたしました。

最後に、六つ目として啓発用 DVD の作成を行いました。目的は、金沢市にとって特徴的な景観テーマを選定し、市民への啓発や他都市への PR、景観教育の材料として使用することです。内容としましては、金沢の柳、松の木のある街金沢、金沢式無電柱化、犀川筋の景観、浅野川筋の景観、金沢の景観を支えるちょっとした心遣いといったものです。

その中の一つであります金沢の柳のある景観について、今から画面で見ていただき

たいと思います。それではお願いします。

○DVD 上映「金沢の柳」

以上で、景観サポーター１期生の活動発表を終わります。ご清聴、ありがとうございました。

（司会）　吉田さん、向井さん、ありがとうございました。それでは、ここで会場設営を兼ねて休憩を取らせていただきます。パネルディスカッションは 2 時 50 分から始めたいと思います。お時間までにお席にお戻りくださいますよう、お願いします。なお、休憩時間中、景観サポーターが製作しました DVD を上映いたしますので、ご覧くださいますようご案内します。

―　休憩　―

パネルディスカッション「市民との協働による景観まちづくり」

コーディネーター　森　　俊偉（金沢工業大学　教授）

パネリスト　　山岸　政雄（金沢学院短期大学　教授）

橋本　浩司（橋本建築造園設計　代表）

倉　ひとみ（ラッピングアートアカデミー　講師）

駒帰　茂紀（金沢市景観サポーター）

（司会）　これより、パネルディスカッションを始めます。

壇上の皆さまをご紹介いたします。舞台向かって左より、本日のパネルディスカッションのコーディネーターを務めてくださいます金沢工業大学教授の森俊偉

様です。森先生は基調講演に引き続いてのご登壇となりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

続きまして、パネリストの方々を紹介させていただきます。金沢学院短期大学教授の山岸政雄様です。山岸先生は色彩とデザインの専門家で、金沢市景観審議会副会長、石川県景観審議会会長のほか、数々の要職を歴任されています。続きまして、橋本建築造園設計代表の橋本浩司様です。続きまして、ラッピングアートアカデミー講師の倉ひとみ様です。パネリストの４人目は、景観サポーターの駒帰茂紀様です。

ここからは、コーディネーターの森様に進行をお願いいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

（森）　それでは、引き続きましてパネルディスカッションを始めていきたいと思います。

まず、テーマは「市民との協働による景観まちづくり」ということで、先ほど、景観を整えていく上では一般の方々を含めた協働の取り組みが絶対に必要ですよというお話をしたかと思います。それから、金沢の場合は伝統的なものと新しいものと、両方との調和をうまく取りながらやっていくことが重要ではないかというお話をしたかと思います。今日は、今ほど紹介がありましたそれぞれの分野の方４名、景観にいろいろな形で取り組んでいる方々に来ていただきまして、先ほどのテーマに沿った形でシンポジウムを進めていきたいと思っております。

ということで、時間もそんなにありませんので、早速始めていきたいと思いますが、最初に切り出しとしまして、各パネリストの方々に、自己紹介を兼ねて日ごろの活動の状況等、また景観で気になる点等について、お話を願えればと思っております。各パネリストの方、３～４分ぐらいを一つの目安として紹介していただけるといいかと思います。

まず、山岸先生、お願いできますでしょうか。

（山岸）　只今ご紹介にあずかりました山岸でございます。お手元に差し上げました３枚の資料に添って順番にお話をしたいと思います。まず１枚目の「街の色は市民の心映え」。心映えとは江戸の生活作法を研究された越川禮子著「江戸の繁盛しぐさ」にある言葉です。江戸の傘傾げはよく知られた心映えです。金沢で言えば雪道を行き交

うときにお互いに譲り合う作法でしょうか。またその昔、隅田川の倉庫は対岸の人が眩しくないように黒く塗られたとのことです。金沢の都市景観にもさまざまな心映えを期待したいと思う拙文です。

次いで各都市で施策中の「ラッピングバス」と「自転車レーンのカラー化」について金沢の取り組みをご紹介します。（以下スライド併用）

【第１話】城下町金沢のラッピングバス・一周遅れのトップランナーとなるか

一周遅れのトップランナーと言う意味は、近年までラッピングバスを導入していないのは県庁所在地では鹿児島、熊本、金沢と政令都市のさいたま市だけなのです。したがって移動景観でもあるラッピングバスの導入を慎重に検討してきた金沢方式が、遅ればせながら有終の施策となるか否かが全国的にも注目されているのです。顧みますとバスの色彩やデザインが景観問題となった最初の例に1981（昭和56）年の東京都バス問題があります。

当時東京に青空を隅田川に魚をスローガンに革新都政を担うことになった美濃部都知事は、都バスの色も白と青のツートンカラーでシンボライズしました。しかし次の鈴木都知事は都政交代の証として黄色地に赤い帯のデザインに変えました。その結果多くの都民からデザインの品格を巡ってクレームがつきました。そこで次善の策として東京藝術大学等の協力を得て現在の緑色をベースにしたデザインとなりました。これを契機にバスのデザインのみならず色彩の公共性が認識されるようになったのです。騒音ならぬ騒色と言われ始めたのもこの頃からでしょうか。バスのデザインがその象徴性や景観要素として如何に大切であるかの代表例はロンドンの赤いバス（コーチ）でしょう。契機は乱立したバス会社の自主規制の際、一番大きなバス会社の赤い色に統一したことにありますが、いまでは２階建の赤いバスなくしてロンドンは語れません。また格調高いイラストレーションのラッピングで知られたのはウイーンの市電です。停留所には体重計が置いてあって待ち時間の有効利用に供しているのも風格を感じる景観です。（写真）

都市の色彩と類似の関係を取り入れたのは、ブダペストのサンドカラー（砂色）や、オスロのセルリアンブルーの市電です。ブタペストは風土色、オスロは北方圏の気象条件との類似色で魅力的な移動景観となっています。このように見てきますと市内を巡回するラッピングバスの影響

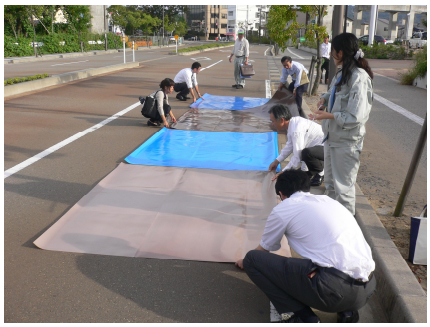
力の大きさを認めざるを得ません。それゆえに金沢市の導入施策はその理念の構築に於いてもまた方法についても誠に慎重です。

都市景観審議会では、先例のある京都市から講師を招き勉強会を開催し、また担当部局の景観政策課では先進事例の資料分析等を入念にされました。重ねて申しますと何よりも対象が路線バスだからです。一定の地域を一定の時間に必ず巡り来る路線バスの広告効果はとても大きいのです。それゆえに歴史的な景観保全とのミスマッチは許されません。

そこで練られたプロジェクトは先ず 10 台のラッピングバスで 2009 年と 10 年の２年間に亘って社会実験を行うことでした。事例はこれからスライドで見て頂くデザインですが、あらかじめ金沢市にデザインを提出の上公開をして頂き走行実験に入りました。実験効果の検証は市内の金沢駅東口もてなしドームイベント広場でパネル展示とアンケートを行いました。その結果はそれぞれに魅力的であり概ね良でした。写真はその一例です。なお念のためさらに本年 10 月から 2012 年までの２年間、ルートやデザイン条件を加除して第２回社会実験を行います。デザインは歴史都市金沢の景観に精通した企業、大学、行政の情報力を積み重ねそうあってほしいロマンを搭載したバスを目指します。多くの市民の評価が待たれます。

【第２話】金沢の景観と自転車レーンのカラー化

もうひとつのお話は自転車レーンのカラー化です。いま自転車による交通事故の多発が社会問題化していることはご存知のことです。そこで国土交通省と警察庁では自転車レーンをブルー化して、色の使い分けによる識別効果で事故防止を推進することとなりました。金沢市では JR 東金沢駅前からの 600 メートルについて相談を受けました。担当部局と私ども県、市の交通、景観関連委員も識別機能を果たしながら歴史都市金沢に相応しい色彩を検討しました。その結果鮮やかなブルーよりも、明度差で識別機能も果たせる茶色系のレーンを提案し了とされました。写真はブルーと茶色系レーンの景観比較の様子です。さらに識別効果を



高めるためベタ塗りを避け 2.6 メートルごとに 1 メートルのハッチを入れました。金沢が茶色系のレーンにこだわるのは街全体が穏やかな木色（もくじき）に包まれている歴史都市の環境と齟齬したくないからです。自転車レーンの事故防止色の選定については高崎市は早くから、また仙台、半田市など全国的に様々な検討がなされ試行されています。来るべき都市の美観を問うもうひとつの都市問題でしょう。以上が金沢の景観に関する昨今の話題です。

（森）　どうもありがとうございました。

では、続いて橋本さんの方からお願いできますでしょうか。

（橋本）　橋本造園設計の橋本と申します。よろしくお願いします。

私は主に町家の設計改修を業務として行っておりまして、その関連として町家にかかわっているいろいろな活動を、少しだけご紹介させていただきます。

（以下スライド併用）

少し唐突なのですが、金沢市の平成 21 年観光調査で、金沢旅行の満足度というアンケートがありました。古いまちなみが 68％で、名勝・史跡や味覚を押さえてトップで、かつ、まちなみが旅行の目的としては下位に位置付けられていますので、来てみたら実はよかったというようなとらえ方でいいのかなと思います。

その一方で、町家がかなり激減している現状がございます。年間ざっと約 300 棟のペースで減少していることが調査で分かっています。このままですと、20 年度で 7,000 棟ですので、10 年後には 3,000 棟ぐらいまで落ち込む可能性があります。

そんな中で、私の方で微力ながらお手伝いしているいろいろな活動がありまして、上から金澤町家研究会、金沢職人大学校、LLP 金澤町家。LLP というのは有限責任事業組合なのですが、そういういろいろな活動を、少しずつですけれどもさせていただいていまして、その説明を少しだけさせていただきます。

まず、金澤町家研究会は、有識者というか研究者の方を中心に平成17年度から始まっておりまして、細かいところは置いておきまして、調査研究活動が最初の柱だったのですが、次第に活用実験、広報活動などにも重点を置くようになってきました。

一つの例なのですが、金沢各エリアで 100 軒ぐらいの町家を巡遊するイベントを今年も 10 月に行いましたが、１カ月間、少ないスタッフで頑張ってやっております。

次に、こちらは助手を務めさせていただいております金沢職人大学校です。これは職人育成の場なのですが、創設のきっかけは、山出市長が市内のある文化財修復の現場に行かれたときに、地元の職人さんが全くいないという現状を知り、これはよくないということで平成８年につくられたということです。その３年後、平成 11 年に、職人さんプラス市職員の方、大学の教員、設計者も含めて、修復を学ぶ修復専攻科が設立されています。その修復専攻科を修了した方が、現在、115 名ほどになります。

ただ、修復専攻科を修了するまでには６年かかるのですが、努力して職人大学校を修了したとしても、なかなかその伝統技術を生かせる機会が少ない一方で、住まい手側の問題として、約半数の方が今住まわれている町家に出入りの職人がいない、どこに頼んでいいか分からないという現状もありました。それで、設計者３名とまちづくりプランナー１名で、金澤町家という LLP 組合を設立いたしました。住まい手さんと職人さんをつなぐ窓口のような役割を担えればという目的があります。

ほんの少しだけ実例をご紹介させていただきます。これは平成 20 年と 21 年に金沢市の方で町家再生活用モデル事業という助成事業があったのですが、６軒中３軒が LLP 金澤町家によるものです。

これは私ではなくて、ほかの組合員設計者が携わった物件です。

そういういろいろな活動の傍ら、本業である設計活動の方もやらせていただいていまして、これは今年、洋館付きの写真店を飲食店に再生した事例です。

内部です。

ということで、私としては、伝統保存側からの発言なのですが、もちろんさまざまな課題があります。住まい手さんにとれば維持費もかかるでしょうし、これからの CO_2 削減対策なども、町家とどう共存していくのかという問題もあります。何とかいろいろな課題を克服して、金沢の財産であるまちなみを次の世代に引き継いでいければと思っております。

以上です。ありがとうございます。

（森）　ありがとうございました。

では、引き続きまして、倉さんの方からお願いできますでしょうか。

（倉）　倉と申します。ラッピングアートアカデミー講師ということでご紹介いただいておりますが、種苗園芸業を営んでおります。私の個人的、プライベートですが、小学校まで石を置いた江戸末期の建物に住んでおりまして、それが今、湯涌の江戸村の方に移築されて現存しているのはとてもありがたく思っております。そういったもので、古いまちなみや街道というものにとても関心を持っております。

金沢市景観審議会の緑化推進の保存樹木や保存樹林の会議に出席させていただいておりまして、造園の方は今、勉強させていただいている状態で、あまり詳しいことになるとまだ皆さんにお伺いしなければいけないぐらいの若輩なのですが、園芸の方で、市役所前の花壇など、四季の花壇の植え替えもさせていただいております。

本当に日本はよいところで、四季折々、季節感のあるものを 4 回植え替えをして季節を楽しんでいただいていたのですが、今、園芸店には長持ちするパンジーやペチュ

ニアというものがありまして、二季になりつつあります。私は、できればやはり四季を楽しんでいただきたいという思いがしております。よろしくお願いします。

（森）　どうもありがとうございました。

　では、続きまして、駒帰さんお話し願えますでしょうか。

（駒帰）　景観サポーターの駒帰と申します。まず自己紹介ですが、私は定年退職まで、東京に本社を置くゼネコンに勤務しておりました。現在は石川県宅地建物取引業協会の理事の一員として、いろいろと活動させていただいております。

　サポーターの活動についてですが、個人的に好奇心こそエネルギーという自分勝手な信条の下に、この活動に取り組ませていただきました。諸先生方のお話を聞く都度に非常に勉強になりまして、私はとりわけ都市景観というテーマは歴史と地理と文化が凝縮されたものではないかという思いで来たわけですが、先ごろ、浅の川園遊会のリーダーのお一人とお会いしたときに、歴史・地理・文化と、もう一つの要素として生活というテーマをその中に入れた方がまさに都市景観ではないかというようなお話を承りまして、非常になるほどなと思いました。サポーターのメンバーが定点の写真をずっと撮って整理していきますと、人が歩いている景観とか、人が営む、あるいは生業のある写真があります。景観というのは、非常に景観としていいのですね。いわゆる動的景観といいますか、人のいない静的景観に対して、人がそこに写っている、あるいは存在するという動的景観こそ、生きている景観ではないかなというような感じがしました。

　余談ですが、浅の川園遊会では、今年は川床をもう少し延長するようです。そして、予約制だったものを、突然行っても利用できるような取り組みをなさるようなお話をなさっていました。しかし、川床そのものが主計町や浅野川とどうマッチングしていく景観なのかというようなことも、また次のサポーターの方々にいろいろと取り組んでいただけたらという思いでおります。以上です。

（森）　ありがとうございました。今ほど、それぞれの立場から景観について取り組んでいることのお話がありました。その中で、山岸先生に少しお聞きしたいのですが、山岸先生は色彩の分野が専門領域ということで、都市の色彩等にずっと関わられてきているわけですが、景観というのは非常に範囲が広く、なかなか一般の人にはどういうところに配慮することが特に重要なのか、把握できにくいところもあるかと思います。色彩以外に、例えば高さの問題とかいろいろとあると思うのですが、そういうことを含めて、こういう要素は景観を考えていくときに最小限まず考える必要のあることではないかという点で何かありましたら、少しコメントいただけるとありがたいのですが。

（山岸）　美しい景観を思うとき大切な視点があります。それは北国新聞の日曜版に作家の曽野綾子さんが“美しい”ことを唱えるのは説明にすぎず、美しく思われる表現を心がけるべきであると説いておられました。まさに景観の創造や評価において心がけねばならない手順にも繋がることです。では創造的で美しく思われる景観の形成にはどんな方法があるのでしょうか。その一例にシステムデザインがあります。一見関係のなさそうなものでも組み合わせによって文化や文明が起こることす。例えば自動車がそうです。丸い輪と四角いシャーシと傘にエンジンを付け加え自動車になります。個々には無関係な要素を思考を研ぎ澄ましつつシステム化すると“美しく思われる”景観が誕生します。歴史都市金沢の景観もあらゆるシステムを駆使して知の組み換えを如何に行うかにかかっています。

（森）　あと、駒帰さんからは先ほど、景観を考えていくときに、いわゆる人の営みや生業がセットであることが非常に重要ではないかというお話がありました。それから、先ほど景観サポーターの方の写真を見せていただいたのですが、すごくいい写真がいっぱいあって、いいところばかりを撮ったのではないかと思えるほどいいところがたくさんありました。これらの写真にもたくさんの人のシルエットが写っていました。景観と人の営みがセットであるということが非常に重要ですし、それが本当の魅力を描き出しているなと思いながら見ていたわけですが、その辺について、駒帰さんの方からもう少し言葉を加えてもらえるとよりありがたいのですが。何かその辺につ

いてコメントを加えることはありませんでしょうか。

（駒帰）　先ほどのサポーターの写真の中にもありましたように、柳が非常にクローズアップしてとらえられていたのですが、私どもが話し合っている中で、何となくこのまちは格子と柳が非常に合っているまちではないかと。意外や行政で、金沢市内の川沿いの樹木に何が多いのかということを調べてあったらしいのです。そうしたら、松でもない、梅でもない、柳なのですね。写真にもありましたように、東茶屋街の入り口にある大きな柳とか、浅野川大橋のたもとにあるガス灯と柳とか、どちらかというと点としての柳が多いのですが、樹木の中で柳が一番多いそうです。

柳というと何となく、泉鏡花とか竹久夢二などの、なよなよとしたような世界が非常に目に浮かんでくるようなまちかなと。ちょっと文学的な表現になったかもしれませんが、そういう思いで、それやこれや、やはりああいう写真とかというのは、何となく生きているというようなものが表現されたら、より質の高い景観になるのではないかという気がします。

（森）　柳というと、確かに先ほどすごく柳が多くて、山岸先生とも「柳がたくさんあるんだね」みたいな話を二人でしていたのですが、昔はやはり柳というと、用水や水辺とセットのようなところがあったのではないですか。どうなのでしょうか。

（駒帰）　多分、柳の木そのものが生きていく上では、そういうものが必要だったのではないかという気がします。本当なら仙台の青葉通りのように大きなケヤキ並木とか、大阪の御堂筋のイチョウ並木とか、ああいうシンボリックな巨大な並木が金沢に合っているかどうかというのは分かりませんが、もう少し銀座の並木に負けないような柳並木がどこかに実現したらいいなという気がします。

（森）　それに関連して倉さんに伺いたいのですが、金沢のまちも最近、かなりまちの中に街路樹とか緑が増えたという感じがするのですが、以前はそんなになかったような感じがするのです。都市景観をつくったり都市に潤いを与えるときに、緑の量を増やすだけでも、かなり違ってくるのではないかという気もするのですが、普段、花や園芸などに関わられている中で、金沢のまちの中に、例えばこういうところに、も

う少しこういう種類の緑が増えると、より潤いのある景観が演出できるのではないか、というようなことを含めて、何かその辺で感じることはありませんでしょうか。

（倉）　私は市内の花壇に携わっていて、先ほどもお話ししましたが、今たくさん種類も出ています。例えば、今ちょうど植え替えされていらっしゃる方が多いかと思うパンジー、ビオラなのですが、市役所前の花壇は、以前は３月にパンジー、６月の市祭前ぐらいにベゴニア、夏が終わりました９月に入るころ、暑さが過ぎてサルビア、マリーゴールド、それで 12 月に葉ボタンというように、大体３カ月ごとに季節の花壇ということで植え替えが行われていたかと思うのですが、このごろは10月からパンジー、ビオラが植えられています。ロングランパンジー、ビオラということで、半年間もつようなタイプが出てきていまして、今は 12 月に葉ボタンではなくパンジーを植えられたり。それは暖冬の兼ね合いもあるかと思うのですが、二季になりつつある。

一つは、とても長持ちして、一般の家庭にはとてもよいことかと思います。一つの花を長くめでていただくという観点ではそれもしかりと思いますが、やはり街路樹というか沿道の花というのは、できたら金沢の市内の花壇としては、ぜひ４回、季節を感じる花壇であってほしいなと思っております。

いろいろなところにプランターが設置されていたり、街路樹の下にいろいろ置いてあったり、公園なども増えて、いろいろ緑が多くなってまいりまして、皆さんもとても過ごしやすくなってこられたかと思うのですが、やはり金沢という土地柄を考えると、市役所のちょっと横に山野草というか宿根草の花壇が少しあってもしかりと思うのです。

あと、先ほど森先生のスライドだったと思いますが、駅前の写真の中に、私たちはハンギングバスケットというのですが、壁面ですね。空間にちょっとモダンにお花が飾ってありました。21 世紀美術館もありますし、そういった面で空間を彩るようなお花というのも、やはり現代的なアピールの仕方で季節を感じるものとしてあってくれたらいいなと思っております。

（森）　そうですね。ハンギングバスケットなどは、まちの景観に抑揚感を与えますよね。その時期の雰囲気を。先ほど山岸先生からラッピングバスの話もありましたが、あのような移動する小物も、よいものであれば非常にプラス側に働き、いろいろな演

出要素や賑わいのアクセントを与えるものというような意味では効果的ですよね。

では、橋本さんに伺います。町家等の取り組みに多く関わられているということで、私も話の中で少し触れたのですが、金沢の伝統的・歴史的なところは、全国でもなかなかそういうものが残っているところは少なく、それらをきちんと維持し、保全・再生を図りながら新しい価値を与えていくことは、非常に重要な金沢の役割だと思います。同時に、いやが応でも現代的なものも動いていくわけですが、この町家等の取り組みをされている中で、そうした点で感じるようなことは何かないでしょうか。

（橋本）　私は小松出身で、５～６年前に石川県に帰ってきたのですが、その前まではもっと過激な、割と現代建築をやっていました。金沢に来る前に仕事でイタリアに住んでいたことがありまして、そこで保存の面白さに気付くというか感じるところがありましたので、今こういうふうに保存をやっています。戻ってきて思ったのは、保存修復に関心のある方が、特に若い人が少ないのですね。僕も本当は新築にも非常に興味がありますが、保存修復に関心のある若い人がちょっと少なすぎると感じています。先ほども申しましたように、町家の喪失する度合いがかなり急激ですので、これ以上少なくなっては本当に困るのではないかと思って、今はやらせていただいています。現代的なものと伝統的なものとの調和という意味では、恐らく人並み以上に関心が高いのですが、人材が少ないという意味もあり、何とか引っ張っていきたいという思いでやらせていただいています。

（森）　今、町家の活用は非常に盛んになってきていると思います。年々目に見えるように減ってきているという状況の中で、１度なくなるとそれをもう一度作り直すということは不可能です。そういう意味ではかなり維持するための努力が行われつつあり、やる以上はまさに１日でも早く関わらないと、それらが失われてしまうのではないかという状況下にもあるかと思います。

今日は会場の方もたくさんみえているということで、事務局から、協働の景観まちづくりというテーマだからなるべく会場の人も引き込んで議論できるといいなという話がありました。皆さんのお手元に「色厚紙の札」が配られていると思います。これを使って皆さんのご意見を伺ってみたいと思うのですが、今パネリストの人から出た話、それから、私がある意味で一番日常的に関心を持ちながら景観に関わっているこ

ととして、一つは、金沢には歴史的なものがたくさんありますよね。だから、歴史的なところによりウエートを置きながら、景観まちづくりをした方がよいという考え方もありますし、金沢には現代都市としての役割もあるわけで、現代都市としてのウエートをもっと高めるべきではないかという考え方もあると思うのです。私の意見は、両面のバランスを取りながらエリアに応じてきちんとやっていくことが必要ではないかというものです。なかなか難しいことですが、そう思っておりまして、その辺について会場の皆さんがどう感じているか、お尋ねしてみたいと思います。

では、まずは古いものにウエートを絶対に置いていった方がいいという意見の方は赤、新しい現代的な造りに絶対にウエートを置くべきだという人は青、両方のバランスを図りながらやっていくことが一番重要ではないか、微妙な話だけれども、そういう姿勢を保っていく必要があると思われる方は黄色ということで、札を上げてみてほしいと思います。

今言ったようなことで、赤、青、黄色の使い分けを間違わないようにしてほしいのですが、では、上げてみてください。パネリストの方もお願いします。

黄色ですね。黄色がやはり圧倒的に多いですよね。それから次に、青と赤は同じぐらいでしょうか。どうもありがとうございました。安心しました。

私もやはり、金沢の 45 万人とか、圏域として 60 万人という都市だとしますと、新しい役割も常に受け入れていく必要がありますし、日本のこういう木造の文化の中では古いものはなかなか残っていないわけで、そういうものの維持というのも、全国的なレベル、さらに枠を広げれば世界的なレベルで重要なことではないかと思っています。ということで、非常に微妙なところを選び取りながらやっていくような、新旧両方をバランスを図りながら、そして、金沢はかなり街区ごとに個性が明快にあると思いますので、そういうところの個性をくみ取りながら、調和を図っていくことが重要なのだろうと思います。今、皆さんが圧倒的に黄色、両方が重要ではないかという札を掲げられて、安心したというところです。

次に、これは価値の持ち方でかなり違ってくると思いますし、なかなか同じ土俵で測るのは難しいかなとも思いますが、私が同様に大事だと思っていることに、景観の整えを図ったりしていく中で、例えば山岸先生が専門分野にされている色彩があります。そこで色についてお尋ねしたいと思います。まちなみを造っていくときに、色をそろえていくことが大事、際立った色が交じるのは非常によくないのではないかというような意味で、まちの色彩としてのコントロールが景観を図っていくときに一番重要ではないかと考える人は赤を。

また、金沢の場合は表通りに面したところがどうしても近代的・現代的な役割を担っているので、かなり高い現代的な建物が並んでいかざるを得ないところがあり、現実のまちもそうなっていると思いますが、ちょっと裏側へ入りますと木造の住宅などがまだたくさんあり、かなり建物の高さが低く抑えられているわけです。金沢では高さの制限もかなり以前から行ってきているので、そんなに際立ったものが出てこないとは思うのですが、それらをルールを作らずに放っておくと、高い建物ができたり低いものができたりします。そういう凸凹したまちは、ほかにたくさんあると思いますが・・・。そこで、景観の整えを図っていくときに、高さに対してのコントロールは、色彩のコントロール以上に重要ではないかと思われる方は青。

三つ目として、少し価値観というか比較の土俵が違うかなとは思いますが、先ほどのサポーターのお話で、水や緑が非常にたくさん写真のカットで出てきたと思います。建築物があるときもおおよそ柳とセットだったり、松の木とセットだったりしていたと思います。こうしたまちの緑化修景がまちの景観という意味でウエートを多く占めるのではないかと思われる方は黄色を。

どれも大事だと思うのですが、一応その中でよりウエートを置くとすると、今言った中でどれに一番ウエートを置くのが金沢のまちを整える上で重要かということで、少し強引かもしれませんが札を上げてほしいと思います。おそらく、３枚とも上げたいと思われるかもしれませんが、一応、測る意味で１枚だけでお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。では、お願いします。

なかなか難しいですね。ほぼ同じですかね。その中で黄色が一番多いですかね。次が赤ですかね。色が目立つというのもあるかもしれませんね。それから、３番目が青という感じですかね。どうもありがとうございました。

黄色ということは、緑化でしたね。植物がまちに潤いを与えるという意味で、もっとあってもいいのではないかということだと思います。私が東京からこちらに戻ってきたときに、東京の方がよほどまちなかの街路樹が多いなと思ったのですが、その後、金沢もまちなかの緑が随分増えてきたと思います。まず、緑を増やしてまちの景観が悪くなるということはないと思います。ただ、落ち葉の問題などもありますが、かつてはみんなで自分のまちの掃き掃除をやったもので、逆に言うと、通りの掃除など煩わしいことを受け入れれば隣近所との付き合いも増えるわけで、そういうことも含めて、今強引に札を上げてもらった限りでは、緑はもっと増えてもいいのではないかというのが、人数としては多かったかなと思います。

色彩や高さに対するコントロール、今ほど言いました緑化も含めて、三つの要素を全部きちんとやっていかない限りは、本当のいい景観は成り立たないと思いますし、そういう意味では少し強引に揚げていただいたわけですが、今後さらに景観行政を進めていく上で、参考にしてもらえるといいかなと思います。

このようなやりとりは楽しいのですが、時間的になかなかそうもいきません。これぐらいにしておきたいと思います。

続きまして、それぞれのパネリストの方に景観に関する話もしていただいたのですが、時間を逆算しますと、そろそろ締めに入らなくてはいけないということなので、最後に締めとして各パネリストの方に、今の会場とのやりとりや、ほかのパネリストの方の意見等を含めて、金沢で市民との協働による景観まちづくりを図っていく上で、こういうことを心掛けていくことが必要ではないかということや、その他、ぜひ言っておきたいということがあれば、２分前後で意見を述べてもらいたいと思います。準備はよろしいでしょうか。

今度は逆回りで、駒帰さんの方から少しコメントをお願いできますでしょうか。

（駒帰）　サポーター活動を通じまして、今後の思いというよりも、1～2 の希望、願望というような思いを巡らしていたので、そのあたりでお話しさせていただきます。

具体的な話になって非常に恐縮なのですが、一点目として西インター大通り景観形成協議会という団体がありまして、そこの役員の方と話をしていましたら、野町広小路から西インターに向かって増泉あたりまで無電柱化が進んでおりまして、今は最終段階に入っているようなのですが、白菊町交差点から野町広小路までの緩い勾配が続く 200 メートルほどの坂道には、名前が付いていないのですね。ぜひ坂のネーミングをされたらどうかと提案していたところです。

一方では、無電柱化にあわせてアーケードを取り外すという事業も進んでいるようなので、ぜひ柳とガス灯でコラボされたらよいのではないかと思うのです。県外からのお客さんが西インターを降りてまちなかへ入ってくる、まさに入口で、右へ曲がれば西の茶屋街、真っすぐ行けば寺町寺院群というところですから、そこでの雰囲気というか演出が非常に重要な場所ではないかと思うので、何かその辺で一つサポーター活動として次に取り組んでいただきたいと思います。

二点目として、たまたま京都で立命館大学の学生と話していたときに、その学生は哲学や禅について非常に勉強していまして、「京都には哲学の道がある。金沢は近々、鈴木大拙記念館を建設されるそうですね。ぜひ鈴木大拙の建物だけでなく、その建物から本多町、小立野台地のすそを、禅ロードというか、哲学の道、禅の道というようなものを造ったらよいのではないか。要するに、ハード整備もさることながら、人間の心に訴えるような禅の、ソフトな面の演出をされたらどうでしょうか」というような話を聞きまして、なるほどなと思ったのです。

過去に県立美術館の裏にエスカレーターやエレベーターを付けるという話がありました。今、禅ロードではありませんが、坂道か階段で高いところへ上がって、21 世紀美術館を見下ろすとか、本多の森公園や鈴木大拙記念館を見るとかというのも、一つの金沢の新たな景観として誕生し得るのではないかと思っております。

（森）　そうですね。現代社会は効率ばかりを求めるところがあって、そういう意味では、金沢のまちの、特に旧のまちなみなどは藩政期に造られたので、歩いて見るの

が本当は一番楽しいのですよね。歩くリズムでまちなみが全部できていると思います。ゆったり歩きながら噛みしめると、一番おいしい味がするまちなみなのだろうと思います。

では、続きまして、倉さんお願いします。

（倉）　私は、この赤、黄、青で本当に元気をいただいたような気がします。私自身は少し遠慮もあって、色彩がやはり大事かなと思って赤を出させていただいたのですが、緑化の黄色が多くて、内心ほっとする部分がありました。

このごろ公共的な公園が数多くできて、私どもはとてもうれしく感じています。しかし、自分の店でお客様と接していると、人工的に芝生を植えたような画一的な公園がそんなに必要なのかというお声を、たびたびお聞きします。私は植物が好きなのですが、とても黄色を出すのがはばかられまして、やはり色の調和が大事かなと思って赤を出したのです。でも、やはり今、声を大にして、緑を大切にと言いたいと思います。私は、石浦神社から県立美術館に上がる坂道などは、とても憩いを感じる、とてもよいところだと思うのです。そういった風情のあるところを残して、大事にしていっていただけたらと思います。

あと、先ほど駒帰さんもおっしゃったように、私どものうちの周りでも、本当に立派な町家のおうちが、徐々に人が住まなくなり静まり返って、夜も電気がつかないところが増えてきていますので、ぜひ早い時期にそういったところをいろいろ考えていただければありがたいと思います。

（森）　今日、倉さんから、四季感を感じるものが重要だというようなお話がありましたね。非常に重要だと思うのです。四季の抑揚がまちにどう反映するかというのは非常に大きくて、メンテナンスを考えると常緑樹は楽なのですが、植えるとすれば、やはりそういう四季の感じられる落葉樹も大切。それから、花は非常に咲いている期間が短いので、華やかさと併せ持って、それが枯れたまま放っておかれると、何ともみじめなものになりますので、そういう意味では非常に小まめな日々の手入れが必要なのだろうと思います。そういうことができれば、逆に景観に対しての思いとか、自分たちが参加してそういうものに対して手入れをするという機会も増えると思うので、四季感の変化は、抑揚を生む意味と同時に、そういう関わりを市民一人ひとりが持つ

ということでも、非常に意味のあることかと思います。

では、続きまして橋本さん、お願いします。

（橋本）　今のお話を引き継ぐような形になるかと思うのですが、駒帰さんも最初に、景観の要素として生活というキーワードが挙げられるのではないかと言われましたが、今週半ばにドイツから環境を専門にする建築家が来られていまして、町家を案内する機会があったのです。修復の方法でいろいろ話をしていたのですが、向こうでは文化財でもきちんと断熱をして、１年中同じ温熱環境で過ごすのがベストだという前提がありまして、それが省エネにつながると。これを日本の町家に当てはめるのは果たしてどうなのだろうという思いがありまして、町家は町家で十分というか、四季を肌で感じる生活様式の素地として町家があるともとらえられると思いますので、そういう生活の中からにじみ出る景観というのもあるのではないかと、今日皆さんといろいろお話をして思いました。

（森）　先ほどの現代社会は効率ばかりを求めているところがあるという話とも関連すると思いますが、冬は寒いなりに、夏は暑いなりにという方が、本当はよいと思います。だから、空調が普及してつまらなくなったと思うのは、夏になっても誰も、どの家も、窓を開けないですね。カーテンを閉めておく方が外との断熱効果がよいので、窓とカーテンを閉めている家がほとんどです。我が家から眺めてもそうなのですが、やはり窓を開けるというのは隣近所との付き合いのきっかけにもなりますし、隣の人がどんな生活をしているのかという雰囲気も伝わってくるわけです。そういうことを考えると、町家は寒いとかという話もありますが、冬は寒いなりに、夏は暑いなりに格子付きの窓を開けて風を入れて、そのときに隣の音も聞こえてくるというような、まさに抑揚感、四季感みたいなものも、景観という意味では非常に重要で、一方で忘れられているところかなとも思いますね。

では、山岸先生、最後にもう一言お願いします。

（山岸）　私は金沢に住まいして 50 年近くになりますが、住むほどになにもかも本物志向に溢れる誇り高き都市だと思ってきました。しかしながら心配が無いわけではありません。それは新聞を一字ずつ塗りつぶしていくとある時点で意味が通じなくなる例えのように、景観の崩壊で金沢が読みにくくなりつつあることです。黒い甍と静かな佇まいの間に極彩色の建物や広告物が滲みこみ金沢の原風景を蝕む心配事です。もっともこれは金沢に限ったことではなくわが国の街や町、農山村、漁村まで広がった心配事でもあり、2005（平成 17）年に国が景観法に踏み切った背景でもあるのですが･･･。顧みますと 1968（昭和 43）年、当時の先達はこのことの先行きを察して全国の景観保全策の先駆けとなる『金沢市伝統環境保全条例』を制定しました。以来 40 余年に亘り歴史都市金沢の景観保全の努力が間断なく続けられてきました。ラッピングバスでは一周遅れのトップランナー方式を選択しましたが、街並みの景観保全ではさらなる先頭を切って走り続けたいものです。先日発行された『魅力ある美しいまち』と題された景観関連条例集によって担保される施策に大きな期待を寄せています。ところで景観には遠景，近景、街の色や緑樹景観のみならず夜景や寺鐘、用水のせせらぎ音、市場の振り売りの声、祭りのざわめきなど音の風景もあります。また加賀鳶の勇壮な出初め式や、寒行の托鉢僧の訪れも金沢を離れると想い出景観になるでしょう。雪吊りと雪景色も金沢の象徴景観です。さらにまた学ぶべき景観保全策として、風の通り道を妨げないように建物や緑樹の配置に気を配り環境景観を培っていると言うドイツ、シュツットガルトの先進的な例も納得です。まさに景観は自然景観から文化景観にいたる暮らし方の約束文化です。本日の景観の来たるを思い行くえを考える市民会議に出席できましたことに感謝申し上げたく思います。

（森）　どうもありがとうございました。今、山岸先生がおっしゃったように、美しく思われるということを意識しながらやればいいということだと思うのですが、まさに一人一人が人に美しく思われるためにはどうすればいいかというような気持ちを持っていれば、いやが応でもまちはきれいになっていくのだろうと思いますね。ということで、そういう姿勢が非常に重要だろうと思います。

最初切り出しのときにも少しお話ししましたが、景観というのは決してフィジカル

な面だけでなく、景観をよくすることとまちをよくするということは連動している場合が多いので、景観づくりというところにウエートを置いていろいろ語られてきたと思うのですが、最終目標は生活していく環境をどうやって快適で誇れるものにしていくかということなので、生活環境のすべてがトータルな意味で美しく快適になっていかない限り、本物の景観などというものは当然できていかないわけです。そういう意味では、あらゆるもの、あらゆる要素が景観という意味合いにおいて重要なのだろうと思います。

それから、最近、国の方も観光ということに非常に力を入れるようになりましたが、かつて日本も高度成長の時期に次々とよいものやきれいなものを失っていったというプロセスがあり、そういうものの価値が結構無視された点もあったかなと思います。しかし、今、あらためてまちづくりや景観づくりに関心が高まってきたと思いますし、観光という言葉も随分意味が変わってきたと思います。物見遊山で、何か一品求めてバスで次々と移動するという形から、今は、食べるもの、飲むもの、生活様式のようなものまで含めて、トータルな生活を見るということに多分一番関心が強くなっていると思います。ヨーロッパの人などは明らかにそういう志向性を持っていると思います。

そういう意味では、トータルな生活を含めた快適さ、美しさみたいなものを持っているまちや都市に、関心を持って訪れる人もたくさんいるだろうと思いますし、そこに生活している人も、自分のまちを誇れるということは非常に重要なことで、そういう視点が景観づくりの基本になるべきものだろうと思います。

かなり時間が迫ってきたのですが、今、それぞれのパネリストの方々から結びの言葉を含めて話していただきましたが、あと少しの時間、会場とパネリストの方との質疑応答という形で、もし聞きたい、質問を投げかけてみたいということがあればそういう時間を持ちたいと思います。何か質問を投げかけてみたいというようなことがありましたら、どうぞ。

（質問者１）　吉田と申します。公共交通利用促進市民会議というところに所属しております。山岸先生に質問といいますか、意見になるかもしれませんが、今月は、実は公共交通利用促進月間なのですが、今日も道路は渋滞ですし、駐車場は次々と増えていく。そういう意味で、景観的にも公共交通の面からもあまり芳しくないと思って

いるのですが、例えば来年 11 月に景観を考える市民会議と公共交通利用促進市民会議で、ラッピングバスの人気投票みたいなものをして、市民の目線で、しかも１年間通して常に市民が公共交通を注目していけるような仕掛けをして、この企業のこの広告は非常に市民から評判が良かったとか、そういったこともあってもいいのかなということを思いました。

（森）　では、ラッピングバス絡みの話かなとも思いますが、山岸先生、ご指名ですが、何かそれに対してございませんか。

（山岸）　ラッピングバスの評価のやり方をさらに前進させてはどうかというお話ですよね。可能な限り、金沢市の行政枠と市民の感情を入れ込んで、いろいろな面で、今年よりも来年、来年よりも再来年と。評価の方法については ing（現在進行形）でもよいわけですね。出来る限り前進させてほしいということですね。

（質問者１）　市民の目が１年間を通じて公共交通に目が向くような、そういう注目を浴びるような手立てとして活用できないかと思ったのです。

（山岸）　一言補足させていただきます。ラッピングバスは先ほどスライドでも見て頂きましたが、先進例としてヨーロッパの都市にはかなりデザインの良いバスが走っています。そこには公共交通は輸送手段と共に移動景観として環境に配慮したデザインでなければならないとの使命感が感じられます。都市や街の個性が象徴された“らしさ”のデザインに格調や魅力が加わり掛け替えの無い都市情報が生まれます。わが国のラッピングバスが増車し一般化したのは東京都バスへの導入が転期であったと思います。当初で 800 台とのこと。石原知事の見識で美術大学の応援体制を得るなど、デザインについても相当な気配りをしてスタートをしたと聞いております。たしかに前向きに考えれば、広告収入が街の活力源になり魅力的な金沢が創出されれば何ら異議はありません。それゆえに実験期間を設け、ご指摘の通り注目を浴びるデザインで是非とも走行させたいものです。

（森）　余談ですが、ラッピングバスとか先ほどハンギングバスケットの話が出まし

たが、こういう抑揚を生む小物、仕掛けみたいなものは、ラッピングバスなどの表情とかポスターなども一緒だと思うのですが、よいものはほんとによいですよね。アートに近いようなレベルのものだと、それはみんなによい印象とよい影響を与えるます。

ただ、それがマイナスにしか働かないレベルのものだと、それはやめた方がよいということで、そういう抑揚ものというのは、その境目をどうきちんととらえるかが非常に重要だと私は思います。

ほかに、いかがでしょうか。はい、どうぞ。

（質問者２）　本間といいます。先ほど皆さんの意見も、緑というものにすごく関心があるということになりました。私も実は、金沢の都市景観にとりまして緑は重要な要素であると常々考えております。特に今日では景観のみならず、CO_2削減とか生物多様性という観点からも、緑が重要であると認識しております。

そういう点を考えますと、先ほども、水辺に柳、あるいは古いまちなみに柳、素晴らしく景観はいいのですが、ただそれだけに留まっていては、今ひとつ消極的だと感じます。もっと積極的に、屋上緑化とか壁面緑化、立体的な緑化があってよい。そして、もう一つ言えば里山。私は広葉樹の森をよく歩くのですが、こんなのがまち中にあったらどんなにいいかなと思うことがしばしばです。金沢の中に面的な森というものが少し欠けているように思います。森先生がお話しされたように、小立野台、卯辰山、そして寺町台、この斜面緑地に恵まれていることから、金沢は何となく緑が多いなと思いますが、やはり旧市街から海岸方面に行くと緑は少ない。そういう点で、せめて１カ所だけでもいい、面的な、広葉樹による、それこそ在来種による森づくりというものも考えてもいいのではないかなと思いますが、これはどなたかというよりも、お答えいただける先生どなたでも結構ですので、よろしくお願いします。

（森）　では、倉さん、お願いします。

（倉）　私は樹木の方は本当に初等科あたりの知識しかないのですが、本間さんがおっしゃったように、やはり雑木の林というのはとても大事なものだと思います。白山もそうですが、絶滅が危惧されているような植物もたくさんあるのですね。金沢城は今、整地されてきれいな公園になっていたりするのですが、金沢城の中にあった植物とい

うのも、数が少なくなっているものもたくさんありますので、そういった面で、やはり日本、金沢というところに合った植物をぜひ守っていくような政策を、市の方でも取り組んでいただけたらと思います。

（森）　少し話は飛ぶかもしれませんが、今日は金沢の旧市内の方を何となく中心にイメージしながら議論が交わされていると思いますが、金沢の駅西の方なども、金沢らしさというのが同様に新しい街区として生まれると、本当はいいなという感じがします。そういうものがどういう形で造れるのかは分からないところがありますが、何かそういうことができると、さらに金沢らしさの圏域が広がるのかなと思います。そして、駅西の方にも、今ほどの話ではないですが、緑のエリアがもう少しあっていいのではないかという気もします。

ほかにいかがでしょうか。はい、どうぞ。

（質問者３）　金沢のまちの中の人の種類なのですが、友だちとよく、歩いているのはこれこれこんな人で、若い人とかあまりいないねと。子どもも歩いていないし。大学が向こうへ行ってしまったり、小学校とか中学校がみんな自衛隊の方に行った、そのせいかなと。どうにかならないかと。結局、私たちも何となく若者がいないという感じと、大学がまちの中にあるべきとよくいわれますが、今度は若者がまちの中から受け取るものがないのではないかなと思いますが、どうでしょうか。

（森）　どなたか、ご意見はありますでしょうか。

（山岸）　今、おっしゃられましたことは、景観と都市の関わりのなかで人々の流動がうまくいっていないと言う事かと思います。いくらか極端な例えですが、ディズニーランドがいつも賑わっているのは魅力があるからです。刺激と実益と楽しさに溢れているからでしょうか。都心の活力が失われるのはこのような誘致要因の不揃いや、不具合によると思われます。

では、本当に魅力は無いのでしょうか。景観に関しては美しく思われる物事を重ねれば魅力的な空間が生まれ、活力の生成に繋がると思います。昨今顧みられている金沢伝来のしぐさや気配りなども、活性化を支えてくれる規範でしょう。例えば美術館

に行くときは一張羅を着るなどもそうです。「絵」には様がついていて「絵様」と言います。したがって絵とご対面するときには清楚で礼儀正しい格好で拝見するのが望ましく、そんな市民が多いほど街の景観も引き締まり活性化します。この分野は森先生もご専門ですが、世界の都市でもきちんとして奇麗な街には多くの人が住まい暮らしています。自分さえ良ければと極彩色の看板や建物で騒音ならぬ騒色をまきちらす環境は、都市の格付けを落しますから要注意です。

（森）　今、山岸先生は景観と絡めながらお答えになったかと思うのですが、私も、必ずしも景観だけではないだろうと思いますので、それについて少しコメントを加えると、やはり金沢のまち中に、ぜひお年よりだけでなく若い人にも住んでもらわなければいけない。今は子どもを産む数が少なくなっているので、子どもの姿を見る機会が昔に比べて少なくなったと思います。やはり金沢とか人口が 100 万人以下の地方都市というのは、人がきちんと住んでいないと、なかなか活気も出ないと思います。そういう意味では、金沢のまちなども、人にもっと住んでもらわなければいけないと思います。

　でも、今までの日本が高度成長の間というのは、おっしゃっるように大学などを郊外に出したりしてきた経緯があると思います。いろいろな施設を郊外に出し、たくさんの人が車で足を運ぶのに便利だと感じてきたわけです。しかし今では、そういう高度成長の社会というのは終わり、いわゆる成熟型の社会に入ったといわれているわけです。そうしたときに、地方都市などは住む余地はたくさんありますから、最近のいろいろな施策的な意味合いでは、まちなかに若い人もきちんと住んでもらいたいということで、そういうための制度もいろいろ作り始めてきている思います。いろいろな意味で､まちなかにきちんと人が生活できるような手立てを講じようとしていますし、私が所属する金沢工大の学生も、大学キャンパスみたいな形でまちなかに足を運ぶ機会を生み出したてきたり、明かりのイベントなどいろいろやっています。こうした活動に一生懸命参加して、できるだけまちに足を運ぶ機会を増やしているという点がありますが、おっしゃるように、本質的には、まち中にいろいろな年代の人が住んでいかないといけないのだろうと思います。よろしいでしょうか・・・。

それでは、大体よろしいでしょうか。時間が予定していたよりもかなり過ぎたので、これで締めにしたいと思うのですが・・・。

最後に一言加えるとしますと、サポーターの報告などを含めて、私自身が感じたことは、景観づくりには物理的な面プラス生活、営みがセットになっていくということが非常に重要で、また、山岸先生が言われた「美しいと思われるように努めなければいけない」という言葉にあるように、みんながその気にならないと、そういう営みも含めた魅力は生まれないわけで、そうした努力が必要だろうと・・・。

また、最近、国の方からも歴史文化都市といった言葉が出てきており、金沢もそうした中に位置付けられていると思うのですが、金沢は幸いにして先ほどの町家みたいな古いものもありますし、生け花があったり、謡があったり、いろいろなことで文化としての生活様式もたくさんまだ残っているわけです。こうしたものも大事にしていくということが、厚みのある景観づくりに寄与できることだと思います。古いもの、新しいもの、それも物理的なものだけでなく、その裏をきちんと支えている生活そのものですね。そういう生活文化まで含めた景観づくりがこれからさらに必要になるだろうし、本物の景観を造る上では重要なことだろうと思います。ということで、今日のテーマにあったように、ハード面、ソフト面を含めて、一般の方々との協働が重要になるのだなということを、あらためて感じ取ったということです。

では、時間もだいぶ超過しましたので、パネルディスカッションとしてはこれで終了としたいと思います。パネリストの方々は非常に活発に意見をいただき、ありがとうございました。それから、会場からもいろいろ意見を伺えてよかったと思います。

それでは、進行をお返ししますので、あとはよろしくお願いします。

（司会）　ありがとうございました。パネリスト、コーディネーターの皆さまに、いま一度大きな拍手をお願いいたします。

この場をお借りいたしまして、景観サポーターの募集についてご案内します。先ほど活動報告があった景観サポーターの第２期生の募集を予定しています。詳細は、来月以降に新聞紙上やホームページなどでご案内しますので、ご応募をお待ちしています。

これをもちまして、本日の「第２回金沢の景観を考える市民会議」のすべてのプログラムを終了いたしました。皆さまには進行にご協力いただき、感謝申し上げます。

また、長時間のご参加、まことにありがとうございました。どうぞお気を付けてお帰りください。

＜終了＞